

# ポルトガルの民族音楽「ファド」

黒 田 美 絵

## Portuguese Ethnic Music “Fado”

Mie Kuroda

“Fado” is an ethnic music in Portugal. The fado has been attracting a great interest of people in the world. In this article, the author discusses features of the fado from the musical viewpoint and reveals the reason why the fado attracts attention from the public in the world.

キーワード

ファド Fado, ポルトガル共和国 Portuguese Republic, リスボン Lisbon, ギターラ Guitarra, 民族音楽 Ethnic Music

所属

レミエ音楽院 Lemie Music Academy

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

### 1. はじめに

“Fado”（ファド）はポルトガルの民族音楽である。筆者が初めてファドを聴いたとき、大きな衝撃を受けた。どの地域の音楽とも違う土着性、表現力の幅の広さ、気持ちのよい歌声の音楽だった。また、日本の演歌のような「こぶし」または「ビブラート」のような節回しがあり、その音楽に興味を抱いた。伴奏は洋梨形のギターのような楽器が用いられ、歌手との絶妙な掛け合いにより歌と音楽が響き合い、別の世界へと引き込まれるようであった。ファドはなぜ人々の心に響くのであろうか。本報では、この魅力に満ちたポルトガル音楽であるファドを紹介するとともに、音楽的な見地からその魅力を考察する。

ファドには二種類ある。ひとつは大学都市コインブラの学生が歌う“Coimbra Fado”（コインブラ・ファド）ともう一つはリスボンのカフェや劇場で歌われる“Lisboa Fado”（リスボン・ファド）である。コインブラ・ファドはコ

インブラ大学の男子学生により歌われてきたファドである。本報においては一般的であるリスボン・ファドに焦点を絞って論ずる。

### 2. ポルトガルの歴史

ファドを理解するためには、まずポルトガルの歴史を知る必要がある。

紀元前数世紀にレバノン海岸を出たフェニキア人は船で地中海を渡り、現在のポルトガルにあたるイベリア半島西岸に到達した。当時、すでに原住民が独特の文化を持っていたと言われている。フェニキア人について、ギリシア人、ケルト人がやってきて原住民と混血された。やがてローマ軍の来襲にあい、リスボンのアルファマの丘に城壁を築いて自分たちの土地を守ろうとした。しかし、リスボンはローマ人の支配下になった。その後、ゲルマン人、西ゴート、モウロ人などの諸族の侵入を受け、アルファマ城主は度々かわった<sup>1)</sup>。1143年ポルトガル王国が成立した。1256年ポルトガル王国のアフォン

ソ3世のとき首都がリスボンに制定された。

1515年にポルトガル王、マヌエル1世によりリスボン西部、テージョ川に面して『ベレムの塔』が建設された。1580年にスペインとの同君連合、1640年にスペインから独立。1755年リスボン大震災。1910年王制からポルトガル共和国を成立させた。1925年に共和制が崩壊し、カルモナ將軍による軍事政権、1932年よりサラザール政権、1968年からカエターノ政権による独裁政治が行われた。そして、1974年のカーネーション革命により民主化され、現在は共和制を採用している。

### 3. ファドの歴史

ファドは19世紀にポルトガルのリスボンに生まれた音楽である。ファドの語源ははっきりとしないが、「宿命」を意味するラテン語“Fatum”からきているのではないかという説もある。ファドでは、リスボンの下層階級の日常生活の物語が歌われる。リスボン市民は、日ごろの憂さをはらすために歓楽街、闘牛場、路地、居酒屋などあらゆる場所でファドを歌ってきた。文献によれば、19世紀半ばにはリスボンの劇場でファドラしきものが演奏されており、1870年頃には現代のファドのテーマやメロディが現れている<sup>2)</sup>。

ファドが一般に広がったのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてである。一般に広まった一因として、Maria Severa (1820~1846) という人気のファド歌手と Vimioso 伯爵との悲恋物語が挙げられる。身分違いの恋、そして彼女の26歳という早すぎる死などが話題になり、この事件をきっかけに貴族のサロンからファドが広まっていった。そして、このころから王室においてもファドが演奏されるようになったといわれている。この事件は1901年に Julio Dantas が物語として出版し、大ヒットした。その後1931年には“A Severa”として映画化されたことで世界中にファドという音楽が知られるようになった<sup>1)</sup>。

ファドの全盛期は1920年代後半から1960年代後半頃である。その時代、ファドは独裁政権の文化政策より保護されていた。しかし、1974年4月25日のカーネーション革命により、サラザール体制の崩壊にともない、政権のバックアップを受けていたファドは一時的に衰退した。

ファドを世界的に有名にした人物として Amália Rodrigues (1920~1999) があげられる。1954年にフランス映画“Les amants du Tage” (過去を持つ愛情) に出演し、それによりファドと彼女の歌声は世界中に広まった。1999年に亡くなるまでファドの女王として君臨した。その後もポルトガルのファド奏者や作曲家などの活躍により、ファドは現在まで受け継がれている。

プロ奏者は海外公演なども行い、ポルトガルの民族音楽としてのファドを世界中に確立してきた。その結果、ファドは2011年にユネスコ無形文化遺産として登録された。現在、ファドを演奏しているレストランは“Casa do Fado” (カーザ・ド・ファド) と呼ばれ、リスボンの Bairro Alto (バイロ・アルト) 地区、Alfama (アルファマ) 地区に多くある。ファドが聴けるレストランは、下記の3種類に分類される。

1. “Fado Profissional” と呼ばれるプロの歌手、奏者が演奏するレストラン
2. “Fado Amador” と呼ばれるお店の人たちが歌ったり演奏したりするカジュアルなレストラン
3. “Fado Vadio” と呼ばれるお店の人だけでなく、お客さんやファドが好きな人が前に出て順番に歌う食堂。

### 4. ファドの演奏形態

ファド歌手のことを“Fadista” (ファディスタ) と呼ぶ。ファドは女性により歌われるというイメージが強いが、実際には性別に関係なく歌われている。伴奏は主に三つの楽器を使用する。一つは“Guitarra Portuguesa” (ギターラ・ポルトゥゲーザ) (図1)<sup>3)</sup> というポルトガルにしかない楽器で、リスボンでは単に“Guitarra” (ギターラ) と呼ばれている。もう一つは“Viola Classica” (ヴィオラ・クラシカ) と呼ばれるクラシックギターで演奏される (図1)<sup>3)</sup>。そして、バスパートの“Viola Baixo” (ヴィオラ・バイショ) が使用される。

ファドの音楽形態はギターラとヴィオラの二本と歌手が基本であり、これにヴィオラ・バイショが加わる事もある。歌手とギターラとヴィオラ一本の場合はヴィオラがリズムパート、ハーモニー、ベースパートを演奏し、ギターラがフィルインのような合いの手を入れる。ヴィ



図1 ギターラ・ポルトゥゲーザ（左）とヴィオラ・クラシカ（右）

オラ・バイショが入ればベースパートを演奏し、ヴィオラが中音域にてフィルインを入れることもある。また、ギターラが二台の場合もある。

#### (1) ギターラ・ポルトゥゲーザ

ギターラの起源は、中世イングランドの「イングリッシュギター」ではないかといわれている。イングリッシュギターは17世紀から18世紀ごろにポルトガルに入ってきた。ポルトの作家、António da Silva Leite が、1796年の著書で自作のイングリッシュギターを「Guitarra Portuguesa」と名付けているので、この時代より「ギターラ」となったのではないかと考えることができる。ギターラにはリスボン型とコインブラ型があり、6組12弦のスチール弦が張ら

れていて義爪ではじいて演奏する。

#### A) リスボン型

ネックが少し短く、形が丸まっているのが特徴である。胴は栗型が多い。調弦は低い方から D3, D4, A3, A4, B3, B4, E4, E4, A4, A4, B4, B4 (図2 (A)) のように各二本組で張られている。

#### B) コインブラ型

ネックが少し長く、先が涙滴型になっているのが特徴である(図3)<sup>3)</sup>。胴はリスボン型より丸い形である。調弦は低い方から C3, C4, G3, G4, D4, D4, G4, G4, A4, A4 のように各二本組で張られている(図2 (B))。

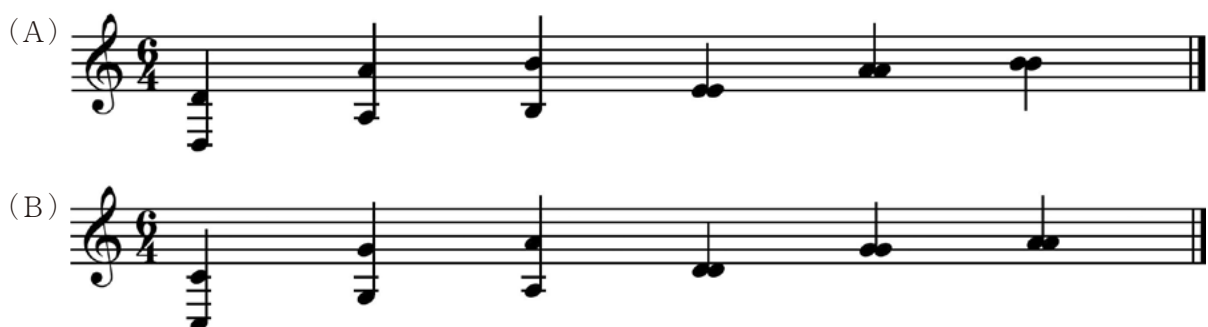


図2 ギターラの調弦：(A), リスボン型；(B), コインブラ型

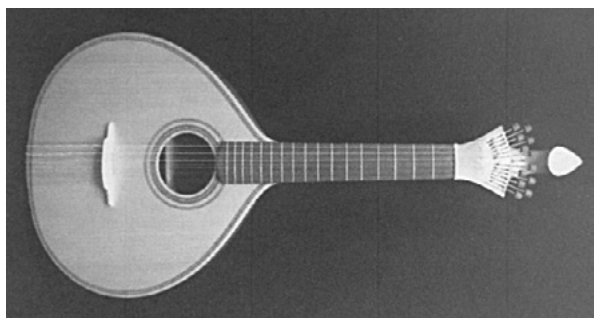


図3 コインブラ型ギター

## (2) ヴィオラ・クラシカ

クラシックギターに金属の弦が張られている。調弦はE2, A2, D3, G3, B3, E4とクラシックギターと同じである。

## (3) ヴィオラ・バイショ

アコースティックのベースギターである。調弦はE1, A1, D2, G2の場合が多い。

## 5. ファドの音楽種類について

ファドは“Fado Castiço”（ファド・カステイソ）と“Fado Musicado”（ファド・ムジカート）の二種類に大別される。ファド・ムジカートは“Fado Canção”（ファド・カンサオン）とも呼ばれる。ファドの詩については4行詩, 5行詩, 6行詩, 8行詩, また多様な組み合わせなど様々な詩の形式が用いられる。この

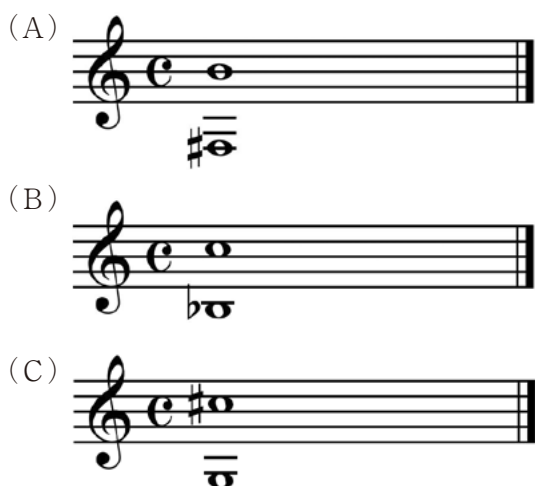


図5 ファドで歌われるいくつかの曲の音域：

(A), “Maria Lisboa” (Davis Mourão Ferreira 作)；(B), “Pove que lavas no rio” (Pedro Homem de Melo 作)；(C), “Havemos de ir a Viana” (Pedro Homem de Melo 作)

ような詩の形式により、上述の区別がなされる<sup>4)</sup>。

一般に、ファドは非常に狭い音域で歌われることが特徴であり、ほとんどの曲が7～12度の音域で歌われる。例として、図5にファド・ムジカートに分類される“Maria Lisboa” (Davis Mourão Ferreira 作), “Pove que lavas no rio”

(Pedro Homem de Melo 作) および “Havemos de ir a Viana” (Pedro Homem de Melo 作)の音域<sup>5)</sup>を五線譜上に示す。この図から分かるように、あまり高音領域を使わないのもファド全般に見られる特徴である。

次に、ファドの二大形式である、ファド・カステイソとファド・ムジカートの特徴をそれぞれ述べる。

## A) ファド・カステイソ

ファド・カステイソは伝統的な（古典的な）ファドである（Castiçoは「純粋な」という意味である）。150から200程度の歌詞が存在するといわれており、それぞれの歌詞に対応した決まったメロディをもたないことが特徴である。ファディスタは歌いたい詩の形式に合った曲や歌いたい曲の形式に合った詩を自由に選択することができる。

演奏は、定型のコード進行に従ってメロディを即興で演奏する場合と、定型のメロディをその場で歌詞に合わせて演奏する場合がある。

定型のコード進行を用いる場合に歌われる歌詞は全て4行詩である。これにはさらに3種類の音楽形式があるが、いずれの場合もトニックとドミナントの和音だけを使用する。3種類の音楽形式は、(1)「Fado Corrido」(ファド・コリード), (2)「Fado Menor」(ファド・メノール), (3)「Fado Mouraria」(ファド・モウラリア)と呼ばれている。このような形式のファドは1950年前後までにつくられた曲が多いが、現在でも制作されている。定型のコード進行だけが決まっており、メロディは決まっていないのでファディスタがコード進行と歌詞に合わせてアドリブで歌う。この場合、曲は16小節, 24小節程度のシンプルな音楽形式となっている。

- (1) ファド・コリード：長調のトニックとドミナントの和音のみ使われる。
- (2) ファド・メノール：ファド・コリードを短調にしてテンポを落としたものである。従って、トニックとドミナントの和音のみ



が使われる。

- (3) ファド・モウラリーア：ファド・コリードと同様に長調の和音のみが使用される。ギターラの華やかな伴奏パターンが特徴的である。

また、ファド・カスティーソは詩の形式によっても分類できる。詩には、上述した4行詩のほかにも、5行詩、6行詩、8行詩、10音節4行詩などがある。ファド・カスティーソを詩の種類により分類すると下記ようになる。

- (1) 4行詩：1行が7音節で形成される。4行詩は4行がひとまとまりで「1番」となり、次の4行が「2番」、「3番」と続く形式の詩である。ファドの中でも比較的良く見られる形式である。一例を挙げると、

“Senhora do Monte” (Gabriel de Oliveira 作)<sup>4)</sup>

Naquela casa de esquina  
Mora a Senhora do Monte  
E a providência divina  
Mora ali, quase defronte

Por fazer bem á desgraça  
Deu-lhe a desgraça também  
Aquela divina graça  
Que Nossa Senhora tem

(以下省略)

音節数はメロディの音数と考えられ、1行に7から8つの音符があてはめられる。各行の最後のアクセントまでを7音節と数えることが慣例であるので、行末の単語にアクセントがない限り実質的に8音節となる。

- (2) 5行詩：1行が7音節で形成される。以下に歌詞の一例を挙げる。

“O Embuçado” (Gabriel de Oliveira 作)<sup>6)</sup>

Noutro tempo a fidalguia  
Que deu brado nas toiradas  
Andava p'la Mouraria  
E em certo palácio havia

Descantes e guitarradas

A história que eu vou contar  
Contou-ma certa velhinha  
Uma vez que eu fui cantar  
Ao salão dum titular  
Lá pr'ó Paço da Rainha

(以下省略)

- (3) 6行詩：1行は7音節で形成される。6行詩は、ファドの中で比較的多く見られる形式である。

“Foi na travessa da palha” (Gabriel de Oliveira 作)<sup>7)</sup>

Foi na Travessa da Palha  
Que o meu amante, um canalha  
Fez sangrar meu coração;  
Trazendo ao lado outra amante  
Vinha a gingar petulante  
Em ar de provocação

Na Taberna de Friagem  
Entre muita fadistagem  
Enfrentei-os sem rancor  
Porque a mulher qu'ele trazia  
Com certeza não valia  
Nem sombra do meu amor

(以下省略)

- (4) Alexandrino (アレシャンドリーノ)：1行が12音節で形成される4行詩、または1行が6音節で形成される8行詩である。

“Contempo o que não vejo” (Fernando Pessoa 作)<sup>8)</sup>

Contemplo o que não vejo,  
é arde, é quase escuro  
E quanto em mim desejo  
está parado ante o muro  
Por cima o céu é grande,  
sinto árvores no além  
Embora o vento abrande,  
há folhas em vai-vém

Tudo é do outro lado,  
 No que há e no que penso  
 Nem há ramo agitado  
 Que o céu não seja imenso  
 Confunde-se o que existe  
 Com o que durmo e sou  
 Não sinto, não sou triste.  
 Mas triste é o que estou

- (5) Decassilabos (デカシーラブ): 1行が10音節で形成される4行詩である。

“Na Mouraria” (Gabriel de Oliveira 作)<sup>4)</sup>

Na velha Mouraria é onde eu moro  
 Qual jóia sem valor em áureo cofre  
 Agora é lá que eu sofro, canto e choro  
 Como um fadista chora, canta sofre

Embala-ma eá janela o sonho lindo  
 Do Fado suspirando á luz da lua  
 E as lágrimas que choro vão caindo  
 Quais pérolas de mágoa sobre a rua

(以下省略)

各行の最後のアクセントまでを10音節と数えるので、アクセントが語尾にない場合は11音節となる。

#### B) ファド・ムジカート

ファド・カステイーソ以外のファドで、メロディに歌詞が決まっており、「サビ」があるのが特徴である。ファド・ムジカートは、4行詩、5行詩、6行詩、8行詩やそれらの組み合わせなど、詩の形式は非常に多彩である。ここでは、4行詩、6行詩、4行詩+8行詩変格について、有名な楽曲を例に挙げながら音楽的な特徴を紹介する。

##### (1) 4行詩

“Maria Lisboa” (Davis Mourão Ferreira 作)<sup>5)</sup>

É varina, usa, chinela  
 Tem movimentos de gata;  
 Na canastra, a caravela,

No coração, a fragata...

Em vez de corvos no chaile  
 Gaivotas vêm pousar...  
 Quando o vento a leva ao baile  
 Baila no baile com o mar...

É de conchas o vestido,  
 Tem algas na cabeleira,  
 E nas veias o latido  
 Do motor duma traineira...

Vende sonho e maresia,  
 Tempestades apregoa...  
 Seu nome próprio: Maria...  
 Seu apelido: Lisboa...

一般に、ファド・ムジカートの場合、和音進行はファド・カステイーソのようにシンプルではなく、“Maria Lisboa”の場合にも短調と長調が繰り返し現れるような和音進行をする。また、イントロは通常の曲の場合、開始和音はI度が最も多く、まれにV度から始まる場合もあるが、この曲はIV度から開始されている。そしてイントロの最終小節の和音はI度がほとんどである。またイントロがギターラにて4～8小節程度と短いのも特徴である。曲の終止形はI, V, Iの基本形で歌と一緒に終わる。これはほかの詩の形態においても同様である<sup>9)</sup>。

##### (2) 6行詩

“Pove que lavas no rio” (Pedro Homem de Melo 作)<sup>5)</sup>

Pove que lavas no rio,  
 Que talhas com teu machado  
 As tábuas do meu caixão.  
 Pode haver quem te defenda,  
 Quem compre o teu chnão sagrando,  
 Mas a tua Vida não.

Fui ter à mesa redonda,  
 Beber em malga que esconda  
 O beijo de mão;  
 Era o vinho que me deste  
 Água pura, fruto agreste,  
 Mas a tua vida não.

Aromas de urze e de lama,  
 Dormi com eles na cama,  
 Tive a mesma condiço;  
 Povo, povo, eu te pertença,  
 Deste-me Alturas de incense,  
 Mas a tua vida não.

この曲はト短調で6行詩の前半3行詩を二回、後半3行詩を二回繰り返して演奏する形式になっている。またメロディにモルデント、フェルマータが多用されている。イントロの和音進行はF7, B♭, Gm, D, Gmで4小節演奏される。また、メロディはF, E♭, D, Gmの繰り返しであり、ファドに特徴的なメランコリックな和音進行の曲である。これはスペインのフラメンコによくある和音進行にも似ており、両者が互いに影響を及ぼし合ったことを示唆している。

### (3) 4行詩 + 8行詩変格

“Havemos de ir a Viana ongava” (Pedro Homem de Melo 作)<sup>5)</sup>

Entre sombras misteriosas  
 Em rompendo ao longe estrelas  
 Trocaremos nossas rosas  
 Para depois esquecê-las.

Se o meu sangue não me engana  
 Como engana a fantasia  
 Havemos de ir a Viana  
 O meu amor de algum dia  
 O meu amor de algum dia  
 Havemos de ir a Viana  
 Se o meu sangue não me engana  
 Havemos de ir a Viana

Partamos de flor ao peito  
 Que o amor é como o vento  
 Quem pára perde-lhe o jeito  
 E morre a todo o momento.

Se o meu sangue não me engana  
 Como engana a fantasia  
 Havemos de ir a Viana.  
 O meu amor de algum dia  
 O meu amor de algum dia

Havemos de ir a Viana  
 Se o meu sangue não me engana  
 Havemos de ir a Viana

Ciganos verdes ciganos  
 Deixai-me com esta crença  
 Os pecados tem vinte anos  
 Os remorsos tem oitenta

この曲は4行詩と8行詩が交互に演奏される変格型である。イントロはIV, I, V, Iの進行でIV度の和音から開始される。

## 6. まとめ

ファドはポルトガルのリスボンが発祥であり、19世紀半ばに成立して以来、現在まで歌われ演奏され続けられてきた音楽である。歴史的な変遷はあるにしても、現在もかわらず人々の心に残るきわめて情感的な音楽である。今回、ファドをいろいろな角度から検討し、リスボン・ファドの音楽的特徴を次のようにまとめた。

まず和声学的な特徴としては、1) 単純なコード進行である、2) 曲の終わりはI, V, Iの基本形で終わることが多い、3) ファド・ムジカートには一曲の中に短調、長調が交互に出てくる場合が多いことがあげられる。

詩に関しては、1) 4行詩、5行詩、6行詩など決まった形である、2) 詩の内容が人生、生活、愛など身近なテーマが多く情感的であることが特徴である。

メロディに関しては、1) 音節数とメロディの音数は同じになっている、2) メロディの音域は狭く、低い音程が多用される、3) 装飾音符や連打、モルデントが多用される、4) 歌のカデンツが短めに使用される、5) ファド・カステイソにおいてはメロディが決まっておらず即興的に演奏されることを特徴としてあげることができよう。

このようにファドでは、音域が狭くシンプルなメロディであり、ポルタメント、装飾音符、モルデントなどで彩られている。また、曲中にフェルマータがしばしば用いられ、その間の伴奏は全音符でのばすか休符になっており、ソロの歌声を十分に聴かせるようなカデンツア的な構成をとっている。

伴奏楽器はポルトガル独特の楽器であるギターラやヴィオラで演奏され、きらびやかな音

色と哀愁漂うメランコリックな響きが奏でられる。ファディスタの歌とこの演奏の絶妙な掛け合いが聴く者の心を打つために、ファドは心の中に染み入るのであろう。ファディスタが、マイクを使用せず歌い上げる独特の発声法は、ファドが民衆の生活から生まれたことの証拠ではないだろうか。

ファドは民族性の高い音楽であり、歌い継がれてきた歴史がある。現代のファディスタには20代～60代以上の幅広い年齢層の歌手がいる。若いファディスタには若さ溢れるフレッシュさ、張りのある歌声、表現力がある。そして年齢を重ねたファディスタは、時には語るように、時には激情し、時にはむせび泣くような悲しきで人生の悲哀を歌い上げる力があり、若いファディスタとは、また違った聴きごたえのあるファドを聴かせることもできる。

上述のように、ファドは低音域を中心とした狭い音域の音楽であるので、プロのファディスタでない一般大衆にも歌いやすい音楽であるといえよう。聴く者にとっても、情感が直接的に伝わりやすい。このことが、ファドが、今日までポルトガルにおいて民衆に歌いつがれてきた要因であると推察した。

ポルトガルのファドはイタリアの「カンツォーネ」やフランスの「シャンソン」、日本の「民謡」などに通じる民族的で大衆的な音楽である。また、人々の暮らしに根強く息づいている土着的な音楽であり、人々の心に感動をもたらすことのできる音楽である。

## 参考文献

1. 井上宗和『民族学3』 「ポルトガル人の心の歌・ファド」民族学振興会, 1978, pp84-89
2. Museu do Fado (リスボン市立ファド博物館), パンフレット資料, 1998
3. URL:commoms.wikimedia.org
4. 月本一史『ファドの時間 公式ガイドブック』M.T.E.C, 2010,
5. 『Fado português-12fados』natação XXI, 2011, pp 5-6, pp 7-11, pp32-35, pp36-37,
6. www.Portaldofado.net
7. www.vagalime.com
8. www.citador.pt
9. S. João da Madeira『MELODIAS DE SEMPRE』Manuel Pereira Resende, 2002